
裸足クラブ

君鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
裸足クラブ

【Nコード】
N3384K

【作者名】
君鳥

【あらすじ】
あなたは最近、裸足で外を歩いたことがありますか？

(前書き)

雨の中、傘をささずに踊る人間がいてもいい
自由とはそういうものだ

その出来事は、後に五日間クーデターと呼ばれた。

夏が近づいてきたある日、歩行者天国を疾走する集団が現れた。ランドセルを背負った小学生から、スーツ姿のおじさんまで。それは見た目も年齢も見事にバラバラな集団だった。セーラー服姿の女子高生もいたし、トートバッグを肩にかけた主婦風の女性もいた。全部で十五人はいたように思う。

彼らは特別目立った行動をしているわけではなかった。

ただ適当に寄り集まって、町中を全力疾走しているだけだった。赤信号に引っかかるとその場足踏みで立ち止まり、信号が青になるとまた走り始め、人波を縫うように駆け抜けていく。

揃いの服を着ているわけでもなく、全くバラバラで、デタラメな集団だった。どういう集まりなのかさっぱり分からない。

唯一つ、彼らには共通点があった。

皆、どういうわけか、靴を履いていなかった。

靴を履いていない。

町中で裸足。

ただそれだけの事なのに、彼らの存在は異様に目立った。

道行く人々は足を止めて、彼らのことを注視した。

なんだなんだ？

映画の撮影か？

劇団か何かのパフォーマンス？

彼らは裸足で縦横無尽に、傍若無人に走り回るばかりで、なんの

宣伝も宣言もしなかった。

疾風のごとく、ただただ裸足で町を疾走するのみである。

まったく謎の集団。

その姿はユーモラスでもあり、また、ひどく自由を感じさせるものだった。

僕は学校の帰り道で偶然彼らを目撃し、訳もなく魅力された。

足元を見下ろすと、自分はとても薄汚れたスニーカーを履いていた。

そういえば、と僕は思う。

そういえば、最後に裸足で外を歩いたのって、いつ頃だろう？

僕は近くの都市公園に寄り道をした。昔はよくここで友達と遊んだりお花見をしたりしたが、今ではただ公園内を通り過ぎるのみの受験に追われる日々を送っている。

芝生が茂る広場の方を目指して歩いた。

僕は辺りに知り合いがいないのを確認し、こっそり靴と靴下を脱いで裸足になった。

青々と茂った芝生がこそばゆい。

久しぶりに直に踏みしめる大地はひんやりとしていて、それでいて、なんだかじんわりと熱を帯びているように暖かかった。

なんとなく楽しい気分になって、僕は何度もその場足踏みをした、飛び跳ねたりした。

僕は正体不明の、なんだかよく分からない開放感を覚え、無邪気に駆け回っていた子供の頃のことを思い出していた。

足の裏に大地の気配を感じながら、なんだか胸がじんとした。

翌日も彼らは現れた。謎の裸足の集団が。

彼らは縦横無尽に町中をばく進した。友達や家族の情報によると、歩行者天国だけではなく、ビル街やショッピングモールなどにも…

…町の至る所に、裸足の集団が出没していたらしい。

何かの主題を謳い上げるでもなく、ただただ裸足で駆け回る。

武装しないストリートギャング。
僕が目撃した十五人以外にもメンバーがいたらしく、多くの人が裸足の人々を目撃していた。何物にも拘束されず、まるで翼が生えたかのように自由に踊り走る人々を。

さらにその翌日。裸足で町を疾走する人が出現した三日目。

最初に火がついたのは、小学生だった。

彼らの爽やかで軽快な走りに影響を受けた子供たちが、面白がつて真似をして、靴を脱ぎ捨てた。靴を指に引っ掛けて、両手を広げ走り回った。

その日は金曜日だった。明日から休みという高揚感が解放した気分にしたのか、中学生、高校生と徐々に裸足を真似する人が現れ始めた。

もちろん汚い、危ないといって敬遠する人の方が多いが、不安定なハイヒールを履いて足がむくんだお姉さんなどは、今がチャンスとばかりに靴を脱いで町中を闊歩した。夜は酔っ払いのサラリーマンたちが、千鳥足で陽気に裸足で道を歩いた。

四日目の土曜日。

その日、町に革新が起こった。

ポイ捨てされたタバコ、割れた瓶、散らばったゴミくず……。

裸足で歩くには町には危険なものが多すぎると、早朝から清掃活動をする人が現れたのだ。

突然降ってわいた裸足ブームを取材しようと、テレビ局の人が通行人にインタビューをしていた。最初に裸足で走り始めた謎のメンバーたちを追跡したが、見つからないようだった。

これは商売のチャンスだと思ったのか、靴屋さんが出張販売に来ていた。

サンダル、パンプス、スニーカーなど色々と並べ立てるが、靴は一足も売れず、結局靴屋さんも裸足になって歩いて帰った。

そして五日目の日曜日。

多くの人が、休日を裸足で過ごした。

砂浜や芝生のある公園はもちろん、スクランブル交差点をも人々は裸足で歩いた。

僕は受験勉強を切り上げ、久しぶりに友達と遊びに町に出かけた。僕は歩行者天国の真ん中で靴を脱ぐ。

初夏の太陽に熱せられたアスファルトはじんわりと暖かく、まるで自分が地面から生えた一個の生物のように感じられた。

町中を裸足で歩く。

ただそれだけの事なのに、なぜかワクワクした。

もしかしたら行きかう人々の中に初代裸足メンバーが混じっているかもしれないが、確認のしようがなかった。

その日、人々は靴を脱ぎ去り、原始時代の人間のように自由になった。

六日目の月曜日。

超局地的に発生した空前絶後の裸足ブームは、嘘のように治まっていた。

「馬鹿らしい」と言って斜に構え、ブームに乗れなかった人が人目を忍んでこっそり裸足を試すくらいで、人々は変わらぬ日常に戻っ

ていた。

まるで何事もなかったかのように靴を履いて、電車に乗って、学校や会社に通う。

僕はひそかに期待していたのだが、それ以降、裸足で町を疾走する集団が現れることはなかった。

唐突に現れ、唐突に消える。

まるで嵐のような人々だった。

人々が靴と常識から解放され、カーニバルのように浮かれていたこの数日間のこととは、後に解放区、五日間クーデターと呼ばれ、人々の語り草になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3384k/>

裸足クラブ

2011年8月12日03時26分発行